

## 詩山鳳山寺の進香

陳梅卿

### 一、進香

一九九六年一〇月三日早朝、私は高雄市内の前鎮区新生路にある鎮南宮につくと、その門はすでに開かれていた。階段を登り、真中にある神卓に八寸ぐらいの聖王公が鎮座している。聖王公の顔は少し広い官帽に隠れて見えない。ある老紳士が、拝殿の右に座っていた。たぶん同行の聖王公会の会員だろう。近づいて挨拶してみると、朱石鞍さんだと分かった。まず、招待状をもらったお札を述べたが、話している内に短い髭をはやした中年の男が入ってきて、朱石鞍と握手しながら挨拶した。

「私は見送りに来ただけで、他に用事があるので、行けなくなりました。」と中年の男が朱さんに言った。

彼は今年の炉主である張明星さんであった。話している内に、数人が前後して拝殿に入り、持ち込んだきた御神像

を神卓に乗せはじめた。しばらくすると、聖王公会の中心人物である張明星さんが奥さんとやってきて、夫婦で跪いて神卓の前に線香をあげた。

数分後、若い男が私の方に歩いてきてこう言った。

「お荷物を下の方に集めていただきたい。」

この人が旅行会社の添乗員で、私と電話で旅行の要件を話した成功大学卒の施さんであった。

拝殿に、また数人の女性が入り、敬虔に跪き、線香を上げ、祈っている。彼女達も同行の聖王公会の会員だろう。

「さあ、聖王公の御出發です！」廟の管理人を入れた張明星、張明星兄弟などの男性たちは、御神像をかつき出し、厳かに拝殿の香炉を通り越して、中門を通り、門の外で待つている男性に御神像を手渡した。拝殿の外にいる人達は、聖王公の神像を受け取って、天公炉という香炉を通り越した後、赤い帯で聖王公の御神像を胸の前に縛りつけた。全

ての用意が出来た後、鐘と太鼓の音の中、皆と聖王公達は階段を下り、大型バスに乗り込み、大陸の詩山鳳山寺へ出発。今回は三回目の進香であり、初回は一九九〇年で、二回目は一九九三年であった。

胸に聖王公の御神像を抱えているのは張明吉、朱輝雄、郭進福、郭江祥の四人であった。張明吉のかかっているふたつの御神像のうち、ひとつが張氏の家族が祭っているもので、もう一つが自分の家のものである。朱輝雄が持っているのは聖王公会の御神像であるので、いつも列の先頭に立っている。郭進福とその伯父である郭江祥は、それぞれの家の聖王公を奉じてきたのであった。小港の国際空港に行く途中、施さんはマイクを取って、自己紹介を始めた。「私は××の孫で、××の子供でございます。私も前鎮の出身でございます。皆様よろしく願います。私も前鎮の話の中の人名がわたしにとっては意味がなかったのです、すぐ忘れてしまったが、車内の人々はそぞろ笑い始めた。そのあと、だんだん笑った理由がわかってきた。

途中、郭進福さんが、「佑くん、あれとってくれる」、あるいは朱郭月敬さんが「佑くん、なんでまた結婚しないの」と、話しかける声が聞こえた。やけに親しい。

それにこたえる施さんは「叔父さん、そんなに早く歩くのはよくない」、「舅父さん、・・・」、「おばさん、勘弁して

くれませんか、もう結婚の話はいいでしよう」。なるほど、施さんの母親は郭家の娘であり、聖王公会会員の郭進福は母親のいとこであり、郭江祥は母親の叔父にあたる人（外祖父の弟らしい）である。朱郭月敬は叔母にあたる人であり、朱輝雄は遠い親戚であった。車内の笑い声の理由はここにあったのである。

施さんの自己紹介の後、今度は筆者を皆に紹介したくれた。聖王公会の会員が拍手で私を迎えてくれた。バスは無事に小港空港につき、一行は、飛行機で出発し、香港に着いた。

一行は香港で乗り換えて廈門へ、安全検査の時に、聖王公会の会員らは聖王の神像を胸の前に抱えたまま、機械の検査を受けたと言ったが、断られた。やはり、普通の荷物と同様に、横になってテレビのような機械の中に吸い込まれてチェックを受けた後、やっと通過できた。聖王の信者達はこの不敬な事に非常に印象を悪くしたし、私も聖王公のこの「遭難」に同情した。香港が国際的な麻薬の転送ステーションとして有名で、検査が厳しくなるのも理解しているが、検査する係官の硬い表情だけは納得が行かない。毎年たくさんの台湾からの旅客が香港経由で大陸へ進香に行き、係官も御神像ということは充分知っているはずなのに私は思っていた。

## 詩山鳳山寺の進香（陳）

一行は厦門の高崎国際空港に着いたが、とても暑く、恐らく摂氏三〇度を越えていただろう。中型バスに乗って、厦門を出発し、同安經由泉州に向かった。初日の日程は終わり、あとは翌日の進香の準備だけである。

一〇月四日朝、進香団が出発した。

前日の中型バスに乗った一行は泉州市内から詩山鳳山寺に向かい、道中の道路は完成されたばかりのように非常に平坦で広かった。梅山という所に入ると、道が凹凸になった。

詩山に入ると、道沿いの建物は一階建てが多く、土壁に木戸が附いている家が多かった。建物には古風な雰囲気がかもしだされていた。道沿いの店の前に並べられた果物、線香、蠟燭、金紙、赤と黄色の小旗などにここは現在の詩山だと思い知らされた。道沿いの店は進香する信者のために必要品を用意して、商売を行っていた。車が詩山の街道を出ると、一面の田野の風景が目に入り、緑の稲が風と一緒に舞っている。だれかが、この高い所に鳳山寺があると教えてくれた。車が山道に沿って、曲がりくねりながら上に登り、やっと山の中腹にある駐車場に停まった。聖王公会の会員らは下車して進香の準備をし始めた。

車から降りると、大勢の人が急に視野に入ってきた。ある人は一羽の鶏をぶらさげたり、ある人は白と赤の点

がついた饅頭などを竹籠に入れてかついで来たりしていた。若い男女、子供、年輩の人々、婦人、中年の男性が沢山いた。印象に残ったのは、一人の老人が、両側に家族みたいな人に付き添われてゆつくりと階段から降りてきたことであつた。老人は拝礼をすませて帰るところらしかった。

一行がその階段を登ると、登りきったところにある樂團が演奏しているのが目に入った。初老の男性達が聖王公の誕生日を祝うために一生懸命に「南管」のような曲を演奏しており、その曲名も樂團の名前もよく分からなかった。

鳳山寺の山川門に入ると、前殿の神卓に庭鳥、鴨、果物、金紙などの供え物が溢れており、大勢の人々が神卓の前に跪いて線香をあげていた。私は煙のために涙が止まらず呼吸も困難になったが、目の前で数人の女性が神の前で擲筭をしていた。何回もくりかえしている。神卓の上にあつた聖王公はとても新しく、年月の跡を感じさせない。文革の際に、鳳山寺は全てこわされ、近年来大陸に進香する台湾信者によって徐々に現在の様に復元されてきたのである。

後殿の左側に、二つの籐製の轎子が置かれ、前には「××××進香謁祖」という旗が掛けられている。西洋音楽と中国の古典楽声がまざりあつて聞こえてくる中、そのなかの一つの轎が四人に担がれながら、前殿と後殿の間を三回回り、白い制服に白い帽子の西洋樂團の団員も後ろに従った。「晋

江市張林南音社」といふ旗をかけた南管樂團の中年団員達はその後に付いて三回廻り、信者も樂團の後について下山してしまつた。私がまだ朦朧としている最中に、あのグループの信徒は階段から下りて帰路についてしまつた。

氣がついたら、鎮南宮の聖王公会のメンバーは、庭でたばこを吸つたり、後殿の左側で線香をあげていたりしてゐた。私がほかのグループに氣をとられてゐる内に、聖王公会の会員は聖王公の神像を鳳山寺の正殿に持ち込んでいたのである。郭進福さんが正殿の前で会員達にこう言つた。

「二人一組で跪いて線香をあげて下さい」

彼のそばに立つてゐた女性の会員が燃える線香を持つて皆を待つてゐた。すべて用意できたようだ。拝礼の後、神殿に入ると、目の前にある神卓に安置されてゐた聖王公と妙應仙妃の神像が非常にお洒落で現代感が溢れてゐたので、最近作られた雕像だと思つた。神卓上の供品は台湾と同じであり、第一列はお茶で、第二列は乾し椎茸、第三列は果物、第四列は豚の頭、一羽の鶏と乾麺などが並べられてゐた。また、第五列は乾麺だったので、疑問に思ひながら、注意してみると、神卓上の供品は三組の人々が供えてきたものなので、少し雑な感じがした。しかし、しばらくすると、ある人がその一組の供品を持ち帰つたので、三組の人物が所有することが分かつた。それで、鎮南宮の聖王公会

の供品が神卓の一番人に近い所にあつたことに氣がついた。

聖王公会の会員が線香を上げる最中に、私は再度前殿に帰り、山川門と前殿の間にあつた空間には五つの天公炉があり、ひとりの老人が黄色の旗を天公炉の前の低い垣には一匹の羊と一羽の鶏が縛りつけられた。これらは牲であり、供えた後に持ち帰り、料理するものであつた。前殿の中はやはり人が多いし、煙も充満しており、ある老婦人が籤をひきながら、擲筭してゐる。ある婦人達が自分の籤を持つて廟の受付の人に見せて説明をしてもらつてゐた。右側にあつた金炉に、信者達が金紙（紙で作つたもので折つた後に燃やす）を大量にいれた。大陸の金紙は台湾のより大きかつた。ひとまわりした後、後殿に戻ると、二人の若者が竹籠に聖王公を赤い糸で固定して神卓に乗せてゐた。

「どこからきたの」と私は聞いてみた。

「宣橋から来たばかりなのです。進香にかえつてきたんです」と若者は答えた。そういえば、回りに籠にのせられた聖王公を他にいくつも見かけた。

鎮南宮聖王公会の会員達はまた順番に線香をあげてゐるので、私は殿内の奥にあつた聖王公夫婦の部屋に入つた。この部屋で願をかけると、大抵叶うということなので、私も願をかけてきた。張明吉氏の奥さんがベッドに腰掛けて敬虔に願をかけてゐるのに見える。終わつた後にベッド

## 詩山鳳山寺の進香（陳）

の上に台湾の紙幣を置いた。私も同じようにして出てきた。

この時、鳳山寺の係りが貴賓室のドアを開け、聖王公会の会員を招待した。貴賓室の壁にかけている記念の旗などはすべて台湾の廟と神壇の贈り物であり、私がよく知っている廟と神壇の名前もいくつか見かけた。

皆がお茶を飲んでいる最中、私は貴賓室を出て、探索を始めた。後殿の小門を通って奥へ。歩道の両側は廂房（個室）ばかりだが、一番奥はいまだに建設中であった。廂房の終わった所に記念碑があり、見てみると、「謝再興」の名前がある。謝さんは台南の西羅殿の主任委員だ、ここは西羅殿の信者達が献金して建てた物に相違なかった。それで、鳳山寺の様子がはっきりとわかった。先頃私が勝手に前殿と後殿だときめつけた建物は、実際は第一進と第二進であり、第三進はいまだに建築中であった。そうすると、鳳山寺は実は三進の建物であるということになる。

第二進の建物に戻ると、聖王公会の会員達は供物を片づけて帰途の準備を始めていた。「聖王公、私達は正午に出発しましょう」と張明吉さんが顔より大きい木製の筥をもって、神様の機嫌を伺った。

響杯の結果が良好なので、皆喜んだ。皆が片づけている際に、私はひと足先に山川門に出てまわりをみると、三面が緑の田野で、非常に静かであった。鳳山寺がある詩山は

十里四方のなかで唯一の小山であり、鳳山寺は詩山の頂きに建てられていたので、信者達は詩山の中腹まで車で来て、山道の階段をのぼらなければ、目的地には着けない。

聖王公会の六つの神像を先頭に下山し、信徒は神の後に従った。私は例によって、両側を見ながら、歩いていった。下山の途中、中年の男が占いの竹製の道具を持ちながら、「貴方の運命はいいようですね、みてあげましょうか」と私に言った。私は笑いながら、先を急いだ。「漢人の伝統によれば、なにもしないのが一番よい、仕事のために、二回も台湾から福建へ、さらに、詩山くんだりまで来て調査して、どこが運命がよいと言えるものか」と私は思っていた。

泉州のガイドが私を探しにきたので、私は物足りない気持ちのまま、バスに乗り込んだ。この間の私はまさに「トランス」の状態に入ったようで、非常に感動、感動、感動……。六、七年間も祭りを見てきたはずが、なぜこの状態になったのか、私自身もよく分からなかった。

山を降りようとすると、バスがなかなか出発しない。前三台のトラックが遅れた乗客を待っていたのである。三台のトラックの中は人々が腰掛けており、日傘や轎、涼傘なども見られた。このグループは遠くからきた進香客だと分かった。信者達は三台のトラックをチャーターして進香にきたのだが、トラックはまさにただのトラックで、椅子

もなければ、覆いもなかった。信者は全て太陽の下で狭いトラックの床に座って汗をかいていた。いくら一九四九年に新中国ができて、一〇年の文化大革命を経たといっても、民衆は相変わらず「南安續志」の記録のごとく、聖王公の誕生日に鳳山寺にきて「進香謁祖」の慣習を行っている。車が動き始め、進香の日程は終え、一行は廈門へ向かった。

翌日、六人が香港へ、六人はさらに高雄に帰った。四つの聖王公は鎮南宮に戻り、二つの聖王公は郭進福さん達と一緒に杭州、北京、昆明を歴遊した後、高雄へ帰ってきた。

## 二、聖王公と鎮南宮聖王公会

### 「聖王公」

聖王公会会員が親しく呼んでいる「聖王公」は一体何の神様なのだろうか。聖王公の正式名称は広沢尊王であり、又は郭聖王とも相公とも呼ばれている。聖王公は実在した人物で、泉州府南安県清溪の生まれ、姓は郭、名は福あるいは忠福と呼ばれていた。後唐の同光年間（九二三—二五）に生まれ、後晋の天福三年（九三八）に没した。年齢は一三才とも一六才ともいわれ、郭福の死後多くの奇跡がもた

らされたので、南安辺りに住む人は、郭福を神として廟を建て、その廟を郭山廟と呼んだ。南宋の光宗紹熙一三年ごろ、郭福は光宗皇帝によつて「威鎮広沢侯」に封ぜられた。更に慶元年間（一一九五—一二〇〇）、寧宗に「威鎮忠應孝惠広沢侯」に封ぜられた。

聖王公の信仰が台湾に伝来したのは、福建系の住民が台湾に移民した際、神像と香火を持ち込んできたからである。これらの移民は、元々大陸において聖王公を祭っていたので、移住した際、遠く故郷を離れて未知の土地に行くためのお守りとして、小さい聖王公の神像或いは香火を持って台湾に渡ってきた。こうした移民は台湾に移住した後、大陸と同じように聖王公を祭り、その信仰が台湾に定着した。

### 鎮南宮

信者の言い伝えによると、一六八二年前後福建省漳州府金浦県出身の朱孝が台湾に移って、前鎮で開墾を始めた。朱孝は前鎮の土地が広く、人口が少ないことから、開墾する価値があると認めていた。その後、朱孝は故郷に戻り、この事をいとこの張氏に言つて、台湾への開墾を勧めた。そこで、張氏と一緒に台湾の前鎮に移ってきて、開墾を共にした。これが朱、張両氏が前鎮に住むまでのプロセスである。

## 詩山鳳山寺の進香（陳）

当時の前鎮は衛生環境が悪く、伝染病が流行っていたので、人々は神の保護が必要と感じていた。しばらくして、朱、張両氏が故郷へ戻り、県府の関帝廟から香火を取って台湾へ持ち込んできた。持ち込んだ香火を前鎮のある場所に祭ることになった。これが鎮南宮の前身であり、約二六〇年前に台湾で文衡聖帝の御神像が作られた。

鎮南宮の建物はあばら屋から、幾度の移転（現在は高雄市前鎮区鎮北里南宮港二五号にある）と修築によって現在の様子になった。たとえば、光緒三〇年（一九〇四）、廟の土台が低いので、土で高くする工事を始めた。そして、一九一八年からは、土台が狭いために、これを拡張する工事を開始し、三〇年後の一九五三年にやっと土台の工事が完成した。さらにここ数年、数回の修復を経て、できあがったのが今日見られる外貌である。

鎮南宮には主神文衡聖帝のほか、副神の註生娘娘、福德正神などが祭られている。文衡聖帝会、聖王公会などの神明会も置かれている。

## 聖王公会

前鎮頂社に住む伍水の母方の祖先（名前は不明で、姓は郭である）がある日に大溝の底から聖王の神像を拾い、人形として子供に与えた。しばらくすると、ある日神が御神

像に降臨し、曰く、「自分は鳳山寺の郭聖王である」。

その後、郭氏は神像を粉面（修理に出して、ペンキを塗り立てた）し、そしてある神壇に祭らせた。昭和一五年一月ごろ、頂社あたりは日本政府が兵器工場を建てるために、住民を移住させた。そのために、郭氏一族のある部分は現在の鎮南宮あたりに移り、聖王の御神像を鎮南宮に安置し、副神として祭り上げた。

一九二五年ごろ、郭聖王が、郭氏の神壇に祭られる際、張漁が郭童として聖王に使われた。張漁が中心になり、御神像の所有者の乩氏と伍氏、そして、前鎮の大族である朱氏らが聖王公会という神明会を結成した。その目的は、張漁が聖王公の乩童となったあと、事業が順調なので、聖王公に感謝するためであった。

結成された当時の約束には、毎年旧暦二月二日の郭聖王の誕生日の際に、各会員が六斤の豚肉に相当する現金を出し合い、誕生日を祝うための祭りを行うこと、とある。

二月二日には、値年の炉主が集めた費用（五斤の豚肉相当の部分）で、会員の宴会の準備を整える。また、炉主が自費で三牲の牲礼を用意し、劇団（人形劇など）も呼んで、聖王を祭る。そのほか、費用の残金（一斤の豚肉相当の部分）は、聖王公会の維持費にあてられる。そして、宴会がすんだ後に、新年度の炉主を擲筈で選り出すことになっ

ていた。

それから、会員に男子が生まれたときには、牲札を用意して聖王に捧げ、紅龜（赤いもち）を会員に配る。聖王公会は、生まれてきた新生児に二〇〇元の結帯（初対面のお祝い）をあげることもなっていた。

こうした約束からみれば、聖王公会の結成は信仰の目的が主要かもしれないが、一族内の親睦の目的もあったわけで、一地域内の三大家族（張、朱、郭など）のお互いの社交と娯楽の傾向も窺われるだろう。

ところで、私が興味を感じたのは、この神明会はなぜ土地や財産を持たないかということである。例えば、沙鹿の護安宮聖王公会と竹北の保安宮聖王公会を調べたとき、私は両神明会に所属された土地という資料を発見した。しかし、鎮南宮の聖王公会では類似の資料が発見できず戸惑った。

結成される当時（一九二五年）会員の氏名は不完全だが、現在に残された氏名は以下のようである。

張啓周、潘森、藍金水、張雞高、張皆、黃喻、張勝、朱登、張大樹、韓朝、朱狐、伍廣、郭魯、王查某、余胡、郭順泰

つづいて、二年後の一九二七年に会員の氏名は以下のように残されている。

史苑（第五八卷二号）

潘先進、郭魯、王查某、余胡、伍廣、朱狐、張水德、張文豐、陳應上、張料生、吳坤盛、郭德和、郭玉、郭道、周瓦、郭井、洪号、郭別賞、吳放、郭旺

聖王公会の会員は世襲制とはいえないが、会員が死亡した後、大体その二代目の男子が父親のあとについて会員になる。たまには夫が死亡した後、妻が後を継ぐ例（張銀好）もみられる。そのために、現在の聖王公会の会員は四代目の例（張柏祿）もみられる。そして、最近加入した会員（李文揚など）も幾人かみられる。

一九九六年の会員の氏名を見ると、神像所有者郭氏と同じ姓は、郭江祥、郭武明、郭武雄、郭進福、郭麗珠があり、武明を除きすべて同じ家族の出身である。郭武明氏の父は郭魯であり、姓は同じだが、血縁的なつながりはない。しかし、潘石柱さんは母親が郭氏の出身であり、伍水さんの場合も同じである。聖王公会の会員のなかで、六人が神像所有者の末裔であり、1/4を占めていることが分かった。

そして、張姓を名乗っている会員は九名があり、張初雄の身分ははっきりしないが、ほかの八人はすべて前鎮の張氏の出身である。明吉、明星、柏祿は張漁の孫と曾孫であり、ほかの五人は同じ先祖の出身で、遠い親戚といえる。更に李清吉と李清輝兄弟は李姓だが、母親は張漁の孫女なので、血縁の上でも張氏とつながっていた。二五人のなか



### 詩山鳳山寺の進香（陳）

の一〇人が張氏の末裔で占められていることが読みとれる。

それから、朱石鞍、朱宗徳、朱恆徳、朱皆得四人は前鎮の大家族朱氏の出身で、お互いに血がつながっている遠い親戚である。そして、朱氏と張氏の最初の先祖はいとこ同士ということから、朱、張氏も血縁と言えろ。更に郭進福と朱皆得は母親が姉妹なので、いとこ同士と言えろ。

こうした神明会の会員は一体どのように位置づけるのか。ここで郭進福さんの言葉をかりて「僕は親戚同士或いは友人同士が多い」というしかなないのである。

### 三、なぜ！進香にいったのか

「なぜ、六年前に大陸へ進香にいきたくなつたの」と私は訊いた。

「大陸への進香は僕から言いだしたの。まず、僕の先祖は清朝時代には大陸へ進香にいったことがあつたけれど、近年大陸と台湾との間に往来ができたことだし、僕はやはり聖王公を祭るものだから、会員の皆に提言したのです。皆が賛成しましたので、ついに六年前にグループを組んで大陸へいきました。」郭進福さんはこのように回答した。

「どうして郭さんの祖先は大陸の鳳山寺に進香したことが

あつたの」と私はつづけて尋ねた。

「実は僕の祖先は鳳山寺あたりから台湾へ移住したらしく、移つた当時聖王公の神像を持ってきたと聞きました。そこで頂社に住んでいた郭族はその神像を祭つたそうです。僕は最初の進香をした際に、鳳山寺あたりに自分のルーツをさがしたかったのですが、大陸の方はなにも残されてなかったので、残念ながら、なにもわかりませんでした。」と郭氏は答えた。

郭進福の進香の目的は、まず、先祖の慣習にしたがうこととであり、そして、聖王公を信仰することである。さらに、大陸へのあこがれと好奇心で満ちていたからでもある。

そして、私は同部屋に泊まつた朱伍對さんに訊いた。

「なぜ進香にきたの」

「前回はこちらの旦那がきたので、今回は私がきたんですよ！」朱伍對さんはさもあたりまえの感じで答えた。

私は朱伍對さんの態度から進香は義務でありながら、責任でもあることがよみとれた。神様への信仰は言葉の上で表現しないが、きちんとした姿勢で神に対する敬虔さを表現してくれた。

同様の問題を持って添乗員の施明佑さんに質問した。

「今回は商売ではないの、僕の母は郭氏だし、儲からないのを覚悟の上で来たんですよ、目的はやはり、聖王公かな

あ！」成功大学を出た施氏の言葉は聖王公への敬虔な信仰心で溢れていることを感じさせた。

中心人物の張明吉さん夫婦は正式に言葉で進香する目的は答えなかったが、敬虔に祭るしぐさと進香への熱心さで解答した。張さん夫婦と三日間接触する間に、私は張さん夫婦が進香に対して義務と責任を持っていることをずっと感じた。特に張明吉氏が「祖父からのことなので……」とよく言ったことで私は張氏が先祖から継承した慣習を非常に大切にしていることを感じた。さらに私は張さんの「聖王公を信仰してから家族の事業が順調に進んだ。」という言葉から、彼の聖王公への信頼感をも感じ取ったのである。朱石鞍さんと伍水さんは自分の進香した目的は話さなかったが、どのような心境で高雄泉州間を三日間のハードスケジュールで往復したのか、私は知りたかった。

陳美恵、郭陳碧桃さんは会員ではないが、進香に参加した理由は、大陸への旅行と私は思っていた。今回、私は鎮南宮に着いた際、前日の深夜に大陸から帰ってきた二人は意外にもこの場に現れて、私に挨拶した。

「ああ！きてたのか、私達も線香を上げ終ったので、帰るところなの！」

驚いた私はこの二人の信仰の熱心さを再び判読した。

また、最高齢の郭江祥さんは、前夜に戻ったばかりで、

史苑（第五八巻二号）

旅の疲れも癒えぬうちにもうあちこち歩きまわって「玲藝少女歌劇団」の演出を監督していた。この劇団は聖王公会に雇われて、三万円で午後と夜の公演を頼まれて聖王公の誕生日を祝うことになった。郭江祥がこの劇団の公演を交渉したので、一生懸命に監督してきたのである。

鎮南宮の大殿の中で郭進福さん夫婦と出会い、また果物を持ってきた朱郭月敬さんとも会った。進香した人々は聖王公に対する敬虔な信仰心に満ちていると私は感じた。

それから、私は一緒に旅をした際に配った団員表をみた。表の一七人は筆者と一緒に大陸へ進香した人々であり、伍水、朱石鞍、張明吉夫婦、朱伍對五人が三日でかえったが、そのほかの十二人は廈門から杭州、上海などの名所旧跡をめぐってから一〇月十二日に帰途についた。

進香にいった会員は郭進福、江祥、伍水、張明吉、朱石鞍であり、朱輝雄と黃寶慧夫婦は息子朱恆徳の代理でいき、張洪俗も息子張健祥の代理でいき、朱伍對は夫の代理でいくとのことであった。

筆者の観察によると、子供の代理と夫の代理はやはり会員本人の進香といえる。特に朱郭月敬さんは父親の郭徳合が先代の会員で、幼い時から聖王公会の行事に馴染んでいたはずなので、進香するつもりでいったといえる。施明佑は添乗員の仕事でいったかもしれないが、やはり、進香と

## 詩山鳳山寺の進香（陳）

言うことをよく意識していったようである。

陳美恵、郭陳碧桃は会員ではないが、前鎮に居住していることで、鎮南宮には親しみを感じており、また、郭進福との親交と要請からいき、黄明達は鎮南宮の委員で郭江祥との親交から同行し、張玉鳳は郭進福の夫人の弟の妻なので、一緒にいった。そして、朱謝怠さんは会員でないが、朱氏の嫁で、前鎮の在住でよく往来したので、共に進香にいった。筆者はこれらの非会員を会員の候補とみる。最近の話によると、郭陳碧桃は入会するようである。

年齢から言うと、郭江祥の七九才から施明佑の三〇代まで、随分異なっており、社会的な知名度からみると、張明吉のような名が知られた企業家、そして、隠退した老人達、家族の主婦、筆者のような人間も加わり、始終食卓を囲んで暖かく食事を共にした。「聖王公」がいることで、互いの距離が非常に縮ってきたようにみえた。

しかしながら、歴史を勉強した私の興味は進香に参加した人々がどこまでは信仰の目的でいったのか、どこまでは旅行する目的でいったのかであった。一〇月四日に高雄へ帰った五人は義務と責任のもので、信仰のために大陸へいく傾向が強かったと言えるだろう。外の十二人のうち郭江祥、郭進福、朱郭月敬、朱輝雄夫婦らは信仰の目的が優先といえるが、ついでに旅行もする娯楽の目的も含んでいる

ことが考えられる。施明佑さんは仕事だが、自分の家族が所有する神像なので、信仰の目的も一緒に果たすともいえる。外の人々は旅行することが目的だが、ついでに聖王公を信仰しに行くことにはやぶさかではなかった。ただ、わたししがひとつ戸惑うことは四〇代の男性参加者が郭進福さん一人だけだということであった。以上の参加者のなかには、神像所有者の末裔もいるし、神明会の創立者——張氏の末裔もいる。更に地域の大家族——朱氏も参加したのこのことから、非常によくバランスがとれていた。これはこの神明会が七〇年以上維持されてきた最大の理由と思っている。信仰心、そして、血縁、更に地域の協力者の組みあわせでスムーズに運行されてきたのは当然だろう。

更に、私は今回の進香の費用を施さんに聞いた。

「三日間で一人あたり二万二五〇〇円（台湾通貨）で、十日間では四万三五〇〇円ですが、張明吉さんは団員達に一人ずつ足代として一万二五〇〇円を補助しました。」施さんはこのように答えた。

簡単に進香するだけの費用を計算すると、交通費の三八万七千円、鳳山寺の献金一万円、牲礼千円、爆竹二五〇〇円、そして、鳳山寺の係りの葉さんの五〇〇円など合計四万一千円であった。そして、一〇月十三日の劇団の費用は三万円とのことなので、一回の聖王公の誕生日を祝うた

めの進香は少なくとも四〇万円ぐらいかかったわけである。大卒の男子の月給が三万円とすれば、一年以上の月給だと言える。

#### 四、まとめ

一九九七年三月三〇日、私と二人の学生が鎮南宮に着いた、まわりは非常に静かだった。二人の青年が車で台所の道具と椅子、卓などを運んで一階の広場に入った。この日は旧暦の二月二十二日なので、聖王公の誕生日であり、聖王公会の会員が宴会を行なう時であった。この二人は八卓の宴会の料理を用意する料理人であり、つづいて一人の女性がきて、道具をだして洗い始めた。

私は用があつたので、一足先に台南へ帰った。二人の学生の報告によると、張明吉さんは五十一箱のケーキを運んできて、二階にあがつて敬虔に線香をあげた。そして宴会が始まり、終った。参加者は四〇代前後の人々が多く、皆は軽装できて宴会開始前後に挨拶した。張明吉を先頭ににして二〇人の会員と共に二階にあつた聖王公の前で礼拝して、新年度から会員らの要求によって二月二十二日と八月二十二日に宴会を開き、二人の炉主を選ぶことになる旨を神に

伝えた。そして、新年度の值年炉主を擲筭で決め、李文揚が八つの響杯で新炉主になった。

擲筭しながら、朱皆得、伍水、張健祥、張明吉、郭武明の五人が運んできた寿亀（赤いもち）、寿桃（桃型の赤いもち）、ケーキ、パンを老会員達がくばった。この五人は前の年度に男の孫ができたので、会の約束によって、他の会員にプレゼントしたのである。

学生達の記録によると、会員らは一人ずつ七〇〇円の会費をだし、張順在が会の借金三万円のなかの五千円を返却したのであった。ほかの七卓では親しく懇談していたが、張明吉さんがいる卓では静かに食べていた。ただ、若い人がくると、必ず張さんの前にきて「舅公」(母方の大祖父)「叔公」(父方の大祖父)などと呼びかけて挨拶した。張さんも必ず「誰の子供ですか」と聞くのであった。

張明吉さんより年配の会員達は熱心に拝礼し、ものをくばり、言葉交わしていたが、若い年齢層の会員らは淡淡とした表情できて食べて帰ったようであった。

宴会に出席した学生達は不思議と思いながらも、私に以上の様子を報告してきた。

ここで、私は初めて現在の聖王公会の会費がわかり、会も現金などの財産を持って会員にかしだした事があつたと知った。張さんは数年前に前鎮から高雄市内に引越してき

たので、若い四〇代の会員の顔はよく知らなかった。若い会員は出席すると、必ず親戚である目上の中心人物に挨拶しに来た。張さんは若い会員の顔と名字は知らなかったが、自分と同じ世代の会員とは幼馴染、または親戚なので、「誰の子供」ときいた理由はこれだったのである。現在の淡江大学の前身淡水英専を卒業した張さんは教育レベル、事業の成功と住居の引越などの理由によって聖王公会の会員と少し疎遠にしてきた感じがした。だが、聖王公会の六〇代の会員とは幼馴染で、また郭江祥と朱石鞍さんは父親のようであり、義務と責任の下で、皆仲良くやっていく意識があったわけである。しかし、父親の後継できた信仰心が浅く若い会員達にとって、張さんは名の通った偉い親戚の伯父さんで、遠くかけ離れた存在のように感じられるのである。したがって、この若い世代の会員たちは、これからどうやって一緒にこの会を経営していくかということは考えないだろう。このようなことは張さんは意識しているはずだと私は思っている。

最後に、歴史学科を卒業した私は昔のことを想像した。遠い昔、前鎮という未開の土地に朱孝という人が開墾にやってきた。数年後、朱孝が自分のいとこ張氏をさそって台湾へきて共に開拓した。そして、前鎮のある一角、聖王公を祭る郭氏という家族も前後にやってきて開墾した。この三

家族のなかの一部分が農作業をしながら、頂社のある神壇と一緒に聖王公を祭り、その後、聖王公会を結成した。

現在、前鎮は台湾の工業化にしたがって工業区になったので、農作業はできなくなってきた。ただ、鎮南宮は現在でもあるし、聖王公会も存在しているが、会員の一部分は朱石鞍さんのように公務員になったり、郭進福さんのように家電の店を経営していたり、郭江祥のように旅館を経営していたり、朱皆得さんのように工場で働いていた、さらに、ある部分の会員は張明吉さんのように大学の教育を受けて大企業家にさえた。このような変化は朱、張、郭氏の先祖達にはとうてい想像が至らなかっただろう。

# 註

(1) 筈とは竹或いは木で作った腎臓の型のようなもので、これをもって神の意向を伺うことである。

(2) 前篇 陳葵、後篇 李漢清（編）一九七四年 一一七四～一一七六頁 台北：陳其志基金会。

(3) 陳寿祺等 一九六八年『福建通志』二十二卷 五八二頁 台北：華文書局と西羅殿（編）一九八八年『南勢街西羅殿保安広沢尊王真経源起』台南：西羅殿管理委員会 三九～四一頁。

(4) 远流出版社（編）一九八七年『台湾寺廟誌 第三輯 高雄市』台北：远流出版社 二二七～二四一頁。

参考文献

- 一、増田福太郎 一九七五年『台湾の宗教 附董乩』台北：古亭書屋。
- 二、郭金潤 一九八八年『大甲媽祖進香』豊原：台中県立文化中心。
- 三、蔡相輝 一九八八年『北港朝天宮志』雲林：北港朝天宮董事会。
- 四、黄美英 一九九四年『台湾媽祖的香火與儀式』台北：自立晚報出版社。
- 五、高雄市文献委员会 一九九五年『高雄市發展史』高雄：高雄市文献委员会。
- 六、曾玉昆 一九九五年『高雄市各区發展渊源（下冊）』高雄：高雄市文献委员会。

（国立成功大学歴史学系副教授）

一九九八年度立教大学史学会 大会・総会御案内

立教大学史学会大会・総会の開催を左記の如く予定しております。

ぜひ御出席を賜りますよう御案内申し上げます。

立教大学史学会  
会長 野田 嶺志

記

日時 …… 一九九八年六月二十七日（土）十三時～  
場所 …… 立教大学 七号館七一〇教室（予定）

問い合わせ 立教大学史学科  
TEL（〇三）三九八五―二四七九

尚、大会終了後、構内で懇談会を予定しております。  
お誘い合わせの上ご参加下さいますよう。